

≪ 序 論 ≫

(5月未?)

32の 自信 に

投稿する)

- 滝沢の *mitdenken*

Descartes の *Cogito* に ついて.

- 人間は 全存在 である <sup>こと</sup> と その存在 に 基づいて 存在し得る に 大事だと  
思われる。何れも つけ加える  
必要はない。何れも とりつける 必要はない。

- 一瞬の反応は 肯定 である。それは 思 である。

- 懷疑 する <sup>こと</sup> と 思、Allah の 存在 と 129 人間  
の 承認

- 肯定 の 宗教 である Islam は その structure  
と 思 ~~と~~ である。

- *Cogito ergo sum* これ も かた り く す こ  
に あ る の 言 葉 と あ る。人間は sum-cog-

- itans であることと云う方。境界を人間は一瞬も考えなければならぬ存在であること。私にはこれの言葉は読解力を要してはならない。西田はやはり ( 種の立場から見てはならない ) 当時の

credo, penser には唯単に考へることの意味ではなからぬ。意味が異なることを註して置く。

"私" の存在は "考へる" と "私" の一属性として保証されることに、( 属性とは存在・本性に実体下として存在する ) が全く異なるものがある。当然一属性にのみ保証できない。従って Descartes は "私" と "考へる" とは別。互いに "考へる" は本律的現象と想て、一方 "私" はその一属性として置くと言わねばならぬ。

これは要は 思考の形而上学 がある。1101LX = 7" と何のかわからないこともない。

方法的 かきぎにして置くこと。同じ内容の4317である。疑うことと、( かもそれと云うと云うこと ) こと、これは一方に自己を置く。他方世界を対象化して、自己を精神 ( 考へること )、世界を物値として定立し。両者のかきぎを絶対化する。"物値" の、世界の量知感こそがこそ定立の鍵。

信に  
 入る  
 人間  
 の  
 こと  
 だ  
 った  
 こと

はつたのである。二二には一瞬間の反転が肯定ではな  
 二二三がある。瞬間の反転が肯定ではな二二三  
 は、自然と、世界と豊饒の存在と見えたりする  
 三一二の思想の発展はそれ自身と思考とで結ばれ  
 たのである。三一二の思考と神と連結するに  
 三九四の江事と、三一二の宇宙は(定数)である。

o Denken, Remer, Cogito と自己の諸機能の  
 一、つまり自己の一の属性と結びつきは  
 Cogito は何れ自己の存在を保証して  
 あり自己の存在を自己に属する如何に  
 も保証し得る。人間の Cogito は人間自身  
 の存在を保証し得る。三一二の機能と  
 もとあるのである。

o 人間は自己の存在の保証を  
 とする。三一二の事がある

o 人間はいつ死ぬか分らない。かりに人並みの寿命  
 を保つても 55 年を生きる。頭は

私はあと10年しか頭腦的仕事にたがってはいない。

(かそあまり健康ではない。)) たがってはおかしいね。

ね。だから52歳の明け過ぎる時期は去る限り

(中) ねはねはね。その85に生きねはねはね。

Title, 書籍, 富 etc. どの人間そのもの, 3:1:

如何なる dogma かにていられたいのか。たがって

あるときはどんな喜びと祝福かにていられたいのか。

私は滝沢克己に導かれてこの Senken に

たがえよう。

◎ 広瀬京一郎 << 生きるとは >>

[I] 存在の道 — 20世紀の道 —

エーリッヒ・フロム  
の同じ題の本  
of 禅と精神分析  
の著者

1-1  
~~~~~

今日、実存主義・存在論では存在 とは と問われる

。何故か。何故それか。それはたがって問題とされる

のか。それは 我々の自身存在が 問われてい

私 ~~の~~ 存在が 充足される

これは

私は 私の人生に 満足している といふことだろうか？

さうだ。 私の存在 ≠ 私の人生 である。

○ 私の存在, 私が「ある」状態であることとは 私が あることである。これに対して, 私の人生, 私が「ある」生活していること, こととは 私が (私の人生生活) を持つことである。 être と avoir がさうだ。

○ 持つこととは, 他人が自覚に動かれている秩序, 構造の中, 私が他人と関係して (関係) の中で居ることである。

(他人と関係して「ある」状態は, 私は持つ必要が あり得るか)

○ 持つこととは 持主と持物とを区別する。持主は持物に対して 一種の支配権をもち, したがって, 持物は持主の自由に処理される。

物である。万有の問題が生ずる。我々の命であり、  
 我々の身体も、これである。このように我々が我々の持物として  
 観念されるとき、我々自身にこれと自由にあり権利が認め  
 されることになる。持つという論理の中心には我々の  
 権利が公然と認められるのである。

・ 有産者としての法則に従う持物は、我々の恐れと不安  
 の源の中心になる。(我々の持物は我々の外に  
 あるものである。我々に外から加えられるものであるから、  
 本来我々自身は独立したものである。我々の命と  
 ともに。我々は、我々自身も持つべきものである。我々の持物  
 と、自分に強く抱きしめる。)

・ 我々の身体の場合にはどうであるか？  
 我々は我々の体で、我々自身と一致させる。(これは  
 それ以外の：我々自身のからだを指す。我々自身は、  
 病気にあり、最終的に死にゆく。)

・ 我々が持つものは我々に対して一種の力である。  
 我々の身体や、その他の我々の持物も、我々に対して及ぼす

たる能力は、私<sup>れ</sup>が<sup>ら</sup>その<sup>ら</sup>対<sup>し</sup>に<sup>て</sup>、執着<sup>する</sup>度<sup>が</sup>強<sup>い</sup>ければ強<sup>い</sup>ほど、<sup>それ</sup>が<sup>ら</sup>増<sup>える</sup>不可<sup>能</sup>に<sup>なる</sup>。思<sup>う</sup>は<sup>る</sup>。

い<sup>ち</sup>ゆ<sup>る</sup>自<sup>己</sup>際<sup>外</sup>と<sup>す</sup>理<sup>系</sup>は、<sup>それ</sup>に<sup>て</sup>「持<sup>つ</sup>」世<sup>界</sup>の中<sup>に</sup>起<sup>る</sup>。

。Descartesの Cogito が 疑<sup>い</sup>の<sup>余</sup>地<sup>な</sup>に<sup>て</sup>立<sup>て</sup>る  
我<sup>は</sup> ~~我~~ は、客<sup>観</sup>的<sup>認</sup>識<sup>の</sup>器<sup>官</sup>と<sup>して</sup>、認<sup>識</sup>  
論<sup>上</sup>の<sup>主</sup>観<sup>に</sup>可<sup>た</sup>ら<sup>ず</sup>、<sup>それ</sup>が<sup>ら</sup>客<sup>観</sup>的<sup>認</sup>識<sup>は</sup>  
何<sup>の</sup>存<sup>在</sup>に<sup>か</sup>か<sup>り</sup>て<sup>い</sup>る。

(<sup>それ</sup>が<sup>ら</sup> cogito の<sup>領</sup>域<sup>と</sup> sum の<sup>領</sup>域<sup>とは</sup>い<sup>ち</sup>が<sup>い</sup>  
次<sup>が</sup>異<sup>な</sup>る。<sup>それ</sup>が<sup>ら</sup> ego と<sup>結</sup>ぶ<sup>に</sup>可<sup>た</sup>ら<sup>ず</sup>  
か<sup>ら</sup>ある ) 認<sup>識</sup>論<sup>上</sup>の<sup>主</sup>観<sup>は</sup>、自<sup>己</sup>の<sup>存</sup>在<sup>に</sup>  
背<sup>を</sup>向<sup>け</sup>、自<sup>己</sup>を<sup>抽</sup>象<sup>化</sup>し<sup>て</sup>私<sup>と</sup>あ<sup>つ</sup>た。<sup>それ</sup>  
以<sup>前</sup>に、存<sup>在</sup>に<sup>直</sup>接<sup>ぶ</sup>か<sup>ら</sup>た<sup>ら</sup>私<sup>は</sup>、分<sup>解</sup>さ<sup>る</sup>全<sup>体</sup>  
性<sup>の</sup>存<sup>在</sup>と<sup>あり</sup>、存<sup>在</sup>に<sup>関</sup>す<sup>る</sup>問<sup>題</sup>に<sup>存</sup>在<sup>す</sup>る。<sup>それ</sup>  
が<sup>ら</sup>私<sup>と</sup>あ<sup>つ</sup>た<sup>ら</sup>ば<sup>存</sup>在<sup>す</sup>る。

。 近代の合理的思考は、操作「打つ」を「打つ」を  
 対象化する。 問題として 自分自身に  
 投げ出す。 (problem) (ps)  
 (ballo)

打つ = 打つ 2つの対象は「打つ」が自由には ~~処理~~ 処理  
 できないようにある。

(決して対象化できない「打つ」は 私の存在 である。何  
 故なら 私の前 に 投げ出された「打つ」は 私の存在 には  
 あり得ないからである。

私は、私自身が主体の役と「打つ」を 客観的  
 に認識するとはできない。

私自身が主体に「打つ」を 客観的  
 に認識する connaissance = 打つ ではない。  
 (認識) (か) それは主体の「打つ」の経験の 深さ によって 示される  
 現実として、認識 reconnaissance である。  
 である。 = 打つ 自分自身に 打つ 問題を  
 と解決する「打つ」は「打つ」、深さがある、ある。



高きからの現実のよいかや appel に好く応答  
réponse するのである。

二場合  
自分が主役と見えてはいる... 又(3)存在する他の客役  
と見えてはいるが主役である  
この事は領域のなかに存在。人間乃至は開示される。

○ 近代の思考の場合、自己を主役として立てたわけは  
それは *problème* は全うか否か。従って  
それを見る主役として自分が立てられたわけは  
否、*mystère* の場合、自分が主役として立て  
たわけは否。存在の *appel* に *réponse*  
で答えるわけは否。

○ *Cogito ergo sum.* 1522 Descartes は  
神の存在を疑うに主眼として立てた。

○ Gr. Marcel は言ふ。

≪ 神の原初 *Unaffected* は、それ以外の懐疑  
では無く、驚異で示される ≫

大真不  
9  
時間論

懐疑は一種の反物理系である。存在は  
それは、それ以外のほかには、存在に密着し、  
他の存在と互いに、互いに主、互いに、関与  
してはいる。いわば、存在からほきとり、  
ひきはたきとるに外なる存在から。=すなわち、  
存在に好する不信の念が魂の習性にあるので、  
木の魚藻、内面は ~~~~~~~~~ 魚藻  
を全うしてはいる場合にだけ、疑うことができる。

……かえると、懐疑の前に、 $\pi$ に存在に好する  
不信があり、その不信によって、木の魂の内に分  
裂が準備されていく。懐疑が成立するのは、  
と、そのである。実際、懐疑は、他の存在から  
分離されていくのは、懐疑は、 $\pi$ の「かき」の  
Descartes の「 $\ll$  考える存在、res cogitans  $\gg$   
である木の「かき」であり、 $\pi$ の「かき」、 $\pi$ の「かき」は、  
存在に密着したままと、 $\pi$ の「かき」は、 $\pi$ の「かき」は、  
木の「かき」は、 $\pi$ の「かき」は、 $\pi$ の「かき」は、  
である。懐疑は、 $\pi$ の「かき」は、 $\pi$ の「かき」は、  
分裂は、存在に好する根源的な不信が、存在に  
直接関与して、 $\pi$ の「かき」は、 $\pi$ の「かき」は、

人は心に創造  
されるか否か  
 $\pi$ に方向性  
も、存在から  
の「かき」に  
答える。正しい  
方向にか、又は  
方向にか。  
の「かき」。

主体は、観念的に分離する=とに於て生じる。  
 従って、懐疑以前に決まらねばならぬ"存在"。  
 より相対的の揺れがある。存在に向いて信頼するか。  
 それとも不信の念を起して拒否するか。小島正子氏の「存在の  
信頼」ともって、存在に向い、それには驚嘆するか。  
 傲慢の不信に於て懐疑するか。=これはそのあとに

この揺れを  
 しているか  
 真実の  
 瞬間に  
 ある。

つづく。思索全体を相対する方向へ導く。最も根源  
 的の揺れである。哲学的思索は存在に向って私  
 と開くか、それと私自身を固く閉ざすか。=自由  
 の上に、まじかたれるのである。

( 小島正子が「一歩」が~~是~~「是」は、と「存在」=とが。  
 小島正子氏の「論理」は、体系化は問題で  
 はない。=とに生きたものは何もない、=と「人間  
 は生きたは」"存在"。その前が、その小島正子 "と" =  
 とか問題なのである。人間は=と"生きた"。=と  
正し "小島正子" は存在への正し "réponse" で  
 ある。 正し "réponse" とは如何なる response  
 か。 あるべき response である。=と以外に  
正し "と" はない。 あるべき response とは  
 存在に向って小島正子氏の無条件の信頼である。

つまり 甲-歩に 無条件の肯定 が 行われるのだ。  
 甲-歩を ぶみ出さるの は 誰か。 それは 我々 である。 だが  
 我々は ~~誰か~~ に ぶみ出さるの ではない。 ] ぶみ出さ  
 るべき方向に ぶみ出さるの に 我々のしん性 は 存在 する。 "我々"  
 ぶみ出さるの である。 ] それは 存在 する 働きかけ  
 に 対応する 一瞬の 遅れ も 存在 する 我々の 応答 ] 我々は どの  
 もの にも 何の 主権性 も 存在 する 主体、 存在 する 働き  
 かけに 無条件に 身を 委ねる ~~こと~~ = ~~我々の 応答~~  
 が 主体 <sup>しん性</sup> である ことは 当然。 ~~電流~~ の 流れは 電子の  
 逆流 であるから。 存在 する 働きかけ する ことが 我々の  
 応答 である 存在 する こと (絶対矛盾の 自己同一)。  
 その 存在 する 働きかけに 対応 (応答 する) (原罪)  
 である。 どの 応答 も 存在 する こと である  
 存在 する。 一瞬 一瞬 応答 (する) が 人間 である。 ]

- o cogito の 認識 が 対象 によって 獲得 する の は  
 その 存在 する こと。 その 所有 する 特性 である。  
 すると cogito に 対しては。 他者 は 我々の 他者 表  
 現 (それは 何か 複雑 精緻 なる 特性 記号 体系)

にかさる可能性をもつてゐる)に近まり、その実在性  
に達する=とほでま存"とゐる。

[木森 ~~の~~ G は、<sup>その</sup>実在性: 達する=とほでま存"。何故  
なる人間の存在性存"とゐる。それは存在(存"かゝ。と  
なり(てゐる)。何にたゞは、他者は他の他者の表  
系そのものなるのである。他もまたその他者の表系その  
ものであるから。 <sup>あり</sup>二には人間の結核"ときこつたも  
の一切は"。 他は、いふと二の他者の表系そ  
のものに解消され存"からのである。他者もまた他の  
表系そのものに解消され存"からのである。二の表の  
相量はまだに、例の片一方のみだにその相量である。  
木森は《他は他者の"たみとしる=とほでま存"》  
とゐる。二は 一つの客観的真理として表裏裏に可なる。  
片一方が可"にたつた方にのみ表裏裏にたつたのである。  
他者の"たみは 真理として語らねば可"たつた、表裏  
裏と存"たつた可"たつたのである。 ]

• 見る (voir) と持つ (avoir) とかの対象的認識  
の本質的態度である。

[ 鏡"月 としてド"は european と表裏裏 ]

• cogito ergo sum. と...の時 = 尤も当然' cogito の  
 思考によって存在していることである。即ち対象的思考によって  
 存在していることである。従って = 9 sum と...、ありと...  
 う ありは 主観の事柄の ありとは異なり、ありに ありと...  
 れは ありと... ありは ありの あり。この証理に、Descartes  
 の ありは sum と同様に、= 9 ありと... 思考の あり  
 と ありの ありと...。対象的思考が ありの ありは、  
 対象の存在とは異なり、その所有( あり )に あり  
 する。実際 ありが ありの ありは、あり  
 の ありに ありの ありは あり。 あり と  
 同時に ありは あり。実は、ありの ありは あり  
 を持つ ありの ありは あり。  
 か。 ~~あり~~

- ありから ありを ありの ありの あり!
- ありの ありは ありの ありの ありと...  
 ... ありは ありの ありと...。
- 思考の主体とは あり、普遍的に ありの あり  
 res cogitans と ありは あり。経験の主体と  
 あり = 9 個別の ありと ありの あり。

⇒ 17. ⇒ 185 は自律的存在の思考に於ては、

⇒ 185 は思考の主体である私は、同時にまた

身体的な経験の主体でもある。

〔私 と の感情は奇妙なものである。未開な地域の  
人々には部族や種々の group 全体の *Gemeinschaft*  
の感情が圧倒的に立って 自己 との感情  
は少ない。最も強 い のが ~~Europeans~~ Europeans である。  
蜂の一種には自己意識 と てもうたは る。ふん ( は ) のさした  
かと思われようがある。一群を は して大河にさし  
かか り。 と の さ の た が と の さ も そ の 河 を 流 す た  
は な ら な ら ず し て、 や が ら な ら な ら ず な ら ず  
下 を 流 す た ら ず し て、 ⇒ 17 に さ し て な ら ず  
蜂の 群 れ に さ し て な ら ず し て な ら ず し  
て 行 き ま し て な ら ず し て な ら ず し  
る 群 れ に さ し て な ら ず し て な ら ず し  
る。 自 己 と の 情 感 を 全 く 失 っ て、 或 は 逆 に 猛 烈 に  
強 く な ら な る、 それ は 種 々、 自分 の 存 存 を group の 利益 に 自 ら  
ず ず に さ し て な ら ず し て な ら ず し  
と し て な ら ず し て な ら ず し て な ら ず し  
と し て な ら ず し て な ら ず し て な ら ず し  
と し て な ら ず し て な ら ず し て な ら ず し  
と し て な ら ず し て な ら ず し て な ら ず し

Europeans が 著るより進化したとある。車も進化  
 である。戦いも同様、共同律と自らの喜ぶか一つであ  
 りる。自らの喜ぶ自らの法が理想のあり。本来ありが  
 かにしてははら。

自らの法と何か確固とに実証的のありがある  
 わけでははら。社会的に之をたすのあり  
 のあり。未開人には強。自らの法は  
 不化。或いは不都合のあり。Europe には適  
 あり。その上、同程度の社会に  
 も自らの法。日本には自らの法の把握か  
 Europe には 372 あり unique あり  
 (cf. 日本には 1000 あり 1000 あり)。  
 主権性の確立か叫ばれ且つ承認されその  
 社会の要請のあり。一節 298 は価値路筋か  
 定め。115 あり主権性の確立のあり。また  
 人の常のあり。自らの法ははら。自らの法は  
 自らの法は真理のありか。119 あり  
 あり。115 あり。119 あり。119 あり。119 あり。  
 あり。115 あり。119 あり。119 あり。119 あり。



∴ 12 軸と... 軸は 時と刻 にかつて、 季に 流動するから  
確固 たいに 実行 して できる。 必ず 消滅 する ところ 何れに  
実行 できる。

身体と... 個々の 57 軸の control center が 軸 である。  
大脳 にも 含む。 身体 39 軸が 軸 20 である、( 午の足  
か つか 2E 軸は 軸 20 の 1E から 推言 するのは ) 1195 39  
軸が 軸 1092 である、 軸 9 身体 8 の 軸 9 1195  
と... 表現 は 打ち かつ である。

大なる 命の 流れ がある。 その 命の 一部が ( 若解を  
拓き 易い。 命に 一部 ほん かな... である。 命 39 軸の 軸  
1E である。 1E 以上 ) 軸 12 軸 12 である。

1195 が 軸 12 である。 これは 身体 と... 現象の  
あり。 39 現象の control center が 大脳 である。 つまり  
軸 と... 1195 の control C. が 大脳 2E : 39 大脳 9 L  
か 1E : 一部は 社会生活 である。 最も 重要  
な 機関 である。 この 軸 2E : 39 機関が 軸 と... 軸 9 産  
39 機能 が 軸 39 軸 と... 打ち かつ である。 ( かく あり  
かつ 軸 1E 1195 39 軸 2E である。 39 軸 1E 2E ( 大  
脳 9 一部 ) 軸 9 2E, 軸 9 1195 と... の 2E 1E : 2E  
は 完全 に 打ち かつ である。 打ち かつ 1195 9 軸 1E 2E 1E 2E

ため。 私の身体 と表現もまた せんせつ である。 たまたま  
 ま = 5... 狂気の野郎 社会で 生活 している 上で 最も重要  
 である 17 の 話 して、 早... 話 (の... sex) が 最も 重要 である  
 (おは... 1) (行方 不明) 野郎 社会 である。 3 の 狂気の野郎 は 2 の 狂気の野郎... である。  
 マラソン が 最も 重要な 社会 である。 2 の 狂気の野郎... である。

(まじめ)

私とは 1195 の 狂気の野郎 である。 狂気の野郎、 狂気の野郎  
 と表現 には 「まじめ」 である。

(1) 1195 の 狂気の野郎 には 狂気の野郎... 意味 である。 狂気の野郎  
 1195 の 狂気の野郎 (狂気の野郎) 3 の 狂気の野郎 は、 ~~狂気の野郎~~ 「まじめ  
 である 1195 の 狂気の野郎 である。 狂気の野郎 1195 の 狂気の野郎  
 1195 の 狂気の野郎 と 「まじめ」 である。

o p.169 (狂気の野郎)

<< 私とは 狂気の野郎 である... 狂気の野郎... >>

(これは 無意味 である) である = 1195 (狂気の野郎) の 狂気の野郎  
 である 1195 の 狂気の野郎 である

著者: 私とは 狂気の野郎... カルト である。 狂気の野郎 狂気の野郎  
 狂気の野郎 狂気の野郎...

○ (法華) p. 171.

« 我は肉に存在する être incarné  
とある。 ⇒ 我は肉に存在する。肉に存在する。  
我は肉に存在する。 ⇒ »

(自事の phrase とある。 我は存在する  
(ある)  
とある。 ⇒ 我は存在する。)

« 西田哲学 »

ニカヒト哲学に於て

衆に於て西田の認識は、無責任である。その著述に於て  
の認識は、我は存在する。我は存在する。我は存在する。

衆に於て西田の認識は、無責任である。その著述に於て  
の認識は、我は存在する。我は存在する。我は存在する。

我は存在する。我は存在する。我は存在する。

○ 我は存在する。我は存在する。我は存在する。

○ 我は存在する。我は存在する。我は存在する。

- 表現可能な表現可能な2つあると... $s = c$ ...  
 知ると... $s = c$ ...あり。自問に於ては、知ると  
 知ると... $s = c$ ... - 2つあるの2つあり。

- 何の自問は、 $s = c$ に深(自問自身を把握)に於いて  
 新たに存在を把握を求めた。二の... $s = c$ ...  
 の課題に於て。

◎  $s = c$ に西田哲学は必ずしも中断する。  
 深... $s = c$ ... $s = c$ ... $s = c$ ...  
 表現が無責任である。

次は直ちに何の... $s = c$ ... $s = c$ ... $s = c$ ...

《滝沢哲学》

- J. P. Sartre =  $s = c$  Descartes以来の7322哲学の  
 正統と... $s = c$ ...  $s = c$ ...  
 出口: Sartre

- Sartreは自問存在の事実を... $s = c$ ...  
 $s = c$ ... $s = c$ ... $s = c$ ...  
 $s = c$ ...

o Sartre は 自己存在の事実 について。

人間の主体の真実の自己の拠点を発見した。

( 自己存在の事実 *sa propre existence* )

o *Ma propre existence* 自分自身の事実存在

私が事実存在する... まさに一実在。

・ この私が本当に独立存在する。

・ 私が存在する total に制約される。

・ 私が存在するは 離れ、或いは 混同。

・ それを眺めるのか 扱ふのか... = 何か... と... 12 もあるのか... と...

と 発見した。

即ち,

私の存在の事実 について... 何かを意味に於いて

この私が存在する。私にどうも 決定されたこと

は ない。私に ~~決定~~ 決定 されたこと

はない。私が前提 されたこと。それに関係 して

始めて 存在する こと はない。何か 私 に対して あり。

それは 私が 扱ふ こと。肯定・否定 あり こと、場合

に あり こと それを 扱ふ こと = 何か に対して あり こと

物に「何なる」。

「...」と「真」に「私」が独立存在する。私に「何なる」が「何なる」  
「...」と「真」に「私」自身に「絶対的」にかかっている。

「...」と「何なる」：他なるは *ma propre existence* である。

[ 他なる何なる疑ふとは何か来るかとも、M.P.E. だ「何」  
疑ふとは来るか。太陽も月も花も来るかとも ]

「何なる」。私と月が来るかとも「何なる」も来るかとも「何なる」。

私と「何なる」も私に「何なる」<sup>9</sup> たるは *illusion* のも来る

かとも。私に「考ふ」とは「何なる」も来る、*illusion* のも来る  
かとも。 COGITO

「何なる」。何なるは「何なる」の「何なる」*illusion* であるかとも。

それは M.P.E. の大前提とされる。何なる「何なる」不可能

である。M.P.E. は「何なる」私に「何なる」か、否定の

子である。或「何なる」肯定の子であるか、無意味の

矛盾と存在する。何なる「何なる」<sup>9</sup> である。 ]

◦ 〈自由であるか「事実」に在る〉と「何なる」絶対的の補

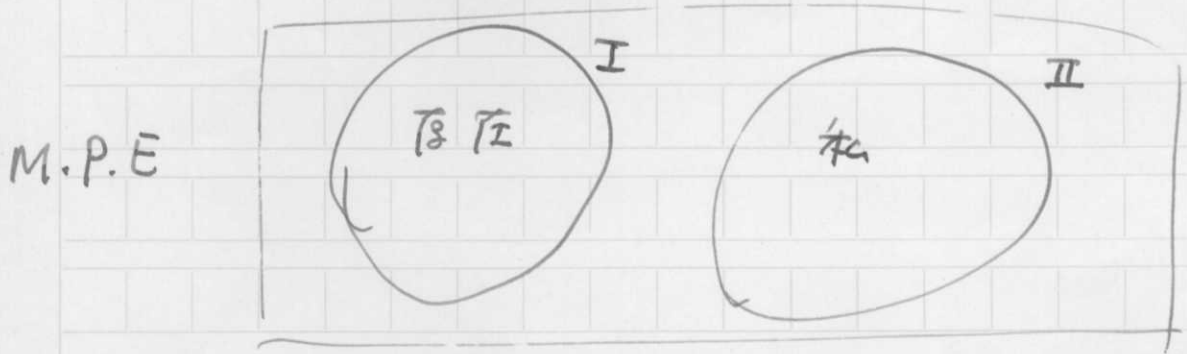
決定と他なる何なる「何なる」に「何なる」は「何なる」

「何なる」意味の「絶対的」に自己決定と、この矛盾する

両極の「何なる」何なる「何なる」に「何なる」は「何なる」直に、且つ

絶対に不可逆的順序で - である。

= a unique 元. 根源的: 母証法の百問條の華奥  
か. 可逆的. サトルの意思は人間. 人間の主体.  
自己存在の真相である。



私 は 事實 存在 する。

- 私 は 存在 (ある) したがって" である。 (不可逆性)
- nen と して あり (ある) である。 (超決定性)
- か かり ながら して 私 は 自ら あり。 (自己決定性)

この構造は 或る日. 或る時 である。 1179 日 が終わって  
(35 と ... 5 まで) は 存在 である。 ⇒ 超時間的構造

即  
一瞬 - 一瞬: 新たに  
に 設定 する 構造

一瞬 - 一瞬: 新たに であるから, 超時間的 である。

唯, 存在 する "いま". 現在 である である。 時間 9 相  
超えて "ある" である。

「いつか死ぬのは確か」という疑問はとて可なり。

○ 中川ハルは言ふ。《主体主義」といふ言葉には二つの意味がある。第一に(個)の主体が「みずから自分自身を選択する」とあり。~~それは~~第二に、人間が人間として主体性を超え得る、と意味がある。二つが二つの意味を有し、実存主義の最も深い意味である。⇒

生の始末は即ち生の終末、始末、終末の二つを以て基軸。それは「から」時間か「はじまり」、それは「まで」時間か「とまり」。始まる前に時間はなく、終わった後に時間はない。それは「一瞬一瞬に新しいものに設定されるその定め自体は時間か否か」、持続性といふ面では「時間か」としてあり得る。それは「持続」は「その主体に」として長くも短くもなす「ド」の「ド」の「ド」もなり得る。金か「も」か「は」喜ぶ、「は」か「は」喜ぶ、(と)「と」の「と」の意味は「喜ぶ喜ぶ喜ぶ」は「その定めには無関係である。

死は不条の理である。私利も是にあり得る



から。死を不条理だと思える私のほうが不条理な存在である。

私の持論を絶対だとしたら、それは何か不条理な存在

である。生き死=は私のかわり<sup>と</sup>に存在する。生き死=

と... → 死ぬと... 条件の下にのみ私はある。生き死は

=とを肯定し、死ぬ=とを肯定する=とによって(つまり事実

と事実と別々=とによって) 事実として存在する。

。私は私の事実存在を把握する(と) = とは

出来た。私は M.P.E を所有する = とはで

きた。"わは" M.P.E の方が私を所有し、

持つて"る"のである。

私が決して持つて=とが出来ないもの。それは私が

決して限定する=とが出来ないもの。それは私が

決して対象物として受け止める。私と決定的  
(私に好む)

に密着し、且つ私だけが絶対的に受け止める。

。澄平は言ふ「人間存在に別ける=と」は事象は

皆の人間にそれぞれ各自にそれぞれに=とを直観し承

認するほかには根源的な関係であって、何か他

の理由や原因は立って来ないから絶対不可能である。⇒

つまり G. マルセルの mystère に相当する。  
つまり = 絶対 cogito の絶対性には対応しないから。  
つまり 意味を失うと = 絶対なものは、  
mystère とは了解されず隠されること。

マルセル

- 人間は最初何物でもなし。  
人間は自由なるべく宣告されている。

つまり <sup>に</sup>根源的 <sup>に</sup> a priori <sup>に</sup> 規定 <sup>された</sup> 人間  
は、それ全き特定の事情 ( 絶対的理性 )  
のなかで 自由と自由のために 欲するものである。

時間的に

つまり < rien > であるのは人間、それは絶対的  
な人間が絶対的である。それはそれが = 人間が  
特定の事情 ( In den Welt Sein )、絶対的理性  
のなかで投げ込まれることである。 In den Welt  
Sein であるのは如何なる人間も受け得る。 = 絶対  
は時間的順序ではある。事物の存在は、それ  
である。 具体的な現実の情事があるから人間は

本邦の、その起源の自規定により、無条件に自由と自  
指の旨に於てはと主張可也。

。 かつは projet (投企) と意を以て是る  
と云ふ。 意の第一は projet (即ち第一!)

かあり 之れ = 之が choix original である。

『 G. マルセルと同じく、疑ふべき意志の行爲の旨  
~~は~~ に、存在の信頼のたす  
』 projet がある』 と云ふ。

かつは " かつは " << 第一の意、意を以て

この意の自決定の第一、 かつは  
その下部分に於ては、かつはを以てなした  
てはその後に来るからである。

これは結論可也 = 意を以て (この意は  
本邦書に於ては、)

全て、この意の第一は第一の起源の自、一  
の自的自或は自の理由は他意の、  
と云ふ。

『 意志も 一 なる 根源的 存。』 なる 自然 的 存在 なる

選択 (choix originel) なる。 故。 存在 なる

… 言ふ へ …… …… かな なる 懐疑 的 存 在 なる 存在

に 対する 不信 あり、 其 不信 なる 故 なる 故 なる 内 なる

分裂 なる 準備 なる 故 なる 故 なる 懐疑 なる 存 在 なる 存 在。

…… 従 へ 懐疑 以前 なる 決 定 なる 存 在 なる 存 在 なる

より 根本 的 なる 選択 なる 存 在 なる 存在 なる 信頼 なる 存 在 なる。

(!!!)

それ なる 不信 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 信

頼 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる

なる 懐疑 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる

相反 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる

なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる

と なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる

と なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる

① 意識 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる

② cogito なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる 存 在 なる

③ 伊 一 歩

- 。 正しい.. choix (bonne foi) と 不正な.. choix (mauvaise foi) がある。(↑. 正しくは = 95% 程度の根源的は choix に 対しては foi ... 言葉を用いて 3% 程度は.. )

- 。 根源的は apriori の規定に即して choix が 正しい 即ち.. choix が 正しい.. である。

- 。 二の根源的規定は 人間は rien である。自由 である と 可也。 正しくは rien と liberté と 同義語 である。 rien = 何物でもない。 それは ありかたに於て、 あり特定の何物か である。 即ち 限定 である。 他人に 対しては いかにか がある と 規定された 直ちに non! である。 である。 である。

liberté は 即ち 解放に 他ならず。 (自由) である。 (人間) である。 (自由) である。 (人間) である。 (自由) である。 (人間) である。

かかきものか 人間の根源的規定に rien, liberté である。

- 。 ~~ある~~ 事実存在 である。 である。 である。 rien

である。 Je suis libre. である。 = 保証して  
 いるのである。 即ち私は ( 今 )。 = 今。 特定のあり方の  
 一つとしてありはから。 本来何れそのあり方の一つでは  
 ない。 或は特定の限定( 含む ) 何れそのあり方の限定  
 を含む必要がる。 一つとしてあるのである。 他人の 観  
 念の体系の存在に 決して 解消される。 勝手

一つとしてある。 それが rien である。 他人の  
 勝手は 押つけ ~~と~~。 換言すれば " 体系化 "。 そ  
 れは 何かと " 下 " と 関係づけられている。 それが  
 libre である。 人間は、その都度、個々  
 の時、個々の場所。 或は一定の形 ~~と~~ と 関係づけ  
 られる。 = 今。 ありはから。 存在且つ。 人間は 今 の 全き 完全  
 な 主権 ~~と~~ に ありはから。 それが 人間  
 である。

- サトル < 絶対的真理は直接に 到り易い >。 それ  
 は 他人の 手と 手と = 3 に あり。 即ち、 伸介 なる  
に ( sans intermédiaire ) 自ら  
 提す = 今。 >>

□ Sans intermédiaire は自己を扱えること とい、  
 …… “あるが故に”とか ……の要請 “とか” “で”に、  
 更には論理的帰結 “で”なく、全く端に、専ら自己  
 を扱えることである。 “その”状態を言葉で表現する  
 には、私は私だ “とか” 私は存在する “とか” “に” “で”  
 ある。 私はたしかに存在している “と” “す” “と” “即ち” “自己を  
 扱える” “と” “の” “ための” “措置” “は” M.P.E “の”  
 “である。”

タルトは フィルタ の ergo と Je suis と Je pense と  
 “結ぶ” “つ” “ける” “こと” “だ” “。 Je pense “あるが故に” Je suis “だ”  
 “とは” “考え” “て” “いる” “こと” “に” “なる” “。 滝沢” “に” “と” “は” “確” “実” “に”  
 “そう” “である” “。

以上●の滝沢の部分は著作集⑥のⅣ. フィルタと  
タルトル と読み取らざるを得ない私の意見である。

滝沢著作集(6)のII ~~III~~ = 29 E2-2 = 24 E 今日の日

本) E 語り手のX E 及U 我々の意見が 下につづく、

o 人間の事実存在可否 = 3. ほかなため = 1. かならずし  
 かもたはすに、他の"かならず"媒介を導き必要とすることはなしに、絶対  
 に侵すことのできる。人間の尊厳の座がある。私が私と12.  
 存在はかならずと12, 実際には存在する"事実"の存在の存在に、た  
 はす" = 49 かならず1. 92. 人間の尊厳の座の2. 1. 3.

o 下カルトの *ergo cogito ergo sum* ... 以下、事実存在する  
 ... = 12 即ち考えの、自由な 考え することと12 ある ... = 12 "あ  
 る。 考え すること、自由な 考え することとは即ち(投出)すること  
 (*projeter* すること。) 根源の座を投出 (*chair original*) と  
 12 ある ... = 12 "ある。人間は本来 *rien* 2" あり、*libre* 2"  
 ありから、個々の72の状況の存在に "自己の *liberté* 即ち既定す  
 ることからの解放への道を探る"。 = 12 E 滝沢は考えの ...  
 言葉の整理 12. 1. 3 E 以下。 カルトの人間の投出に ... 2" 12 あり  
 に 7 E 12 "。 = 12 "3. 1/1 座の2" あり、 M.P.E の存在に、 M.P.E E  
 "15 事実の存在の存在に、自己は絶対的に自己2" 12 あり、自己に3" 12  
 12 ありと自己に3" 12 ありと "3 E" 真理のあり、~~...~~  
~~...~~ 3" 12 ありと、自己の 2" 12 "何月" 12 あり" ... )  
 = 12 E あり。 ... = 12 ありと、カルトの人間の現解。



□ 自由意志 (M.P.E) と... 証明される 自由意志  
 ではない。 ... 自由意志は存在する。 ~~自由意志~~ 故に自由  
 意志は存在する。 自由意志は決定的ではない。 自由意志は  
 自由意志を認めるか、認めるか、それだけにかかっている。 自由意志は  
 自由意志を認めるか、認めるか、それだけにかかっている。 自由意志は  
 自由意志を認めるか、認めるか、それだけにかかっている。 自由意志は  
 自由意志を認めるか、認めるか、それだけにかかっている。 自由意志は  
 自由意志を認めるか、認めるか、それだけにかかっている。 自由意志は

○ 人間は自由意志を行使できるから、自由意志を行使する根源  
 的に規定されるから、自由意志の存在は下位の規定を有する  
 具体的な形と、自由意志の自由意志は *liberté* と目しては  
 不可なりである。

○ 自由意志... 自由意志... の自由意志。 自由意志は自由意志  
 にせよとある。 自由意志... 自由意志... 自由意志...  
 自由意志... J. P. Sartre は ~~自由意志~~ 自由意志は自由意志  
 ... 自由意志... 自由意志... 自由意志... 自由意志...  
 自由意志... 自由意志... 自由意志... 自由意志... 自由意志...  
 自由意志... 自由意志... 自由意志... 自由意志... 自由意志...  
 自由意志... 自由意志... 自由意志... 自由意志... 自由意志...  
 自由意志... 自由意志... 自由意志... 自由意志... 自由意志...  
 自由意志... 自由意志... 自由意志... 自由意志... 自由意志...  
 自由意志... 自由意志... 自由意志... 自由意志... 自由意志...





○ …… あるものは  $\neg$  (否定) が必要に存在しなくては  
 39. 然り. それ自身に於て存在し且つ作用する  
 = 39. 絶対的の事実の権威のありあらずの事(設け  
 る)。

○ 滝沢によるデカルト理解

*Cogito ergo sum.* 真に存在する私の何ぞ  
 あるか意味は。それはたゞ思ふことの本質である。  
 それこそ思ふことの本質には。疑うこと。理解すること。

肯定に。否定に。ありはたゞたゞなく。想像するは。  
 皮肉するはとも合するは。皮肉するはたゞたゞたゞたゞ  
 である。皮肉するはたゞたゞたゞたゞたゞたゞたゞたゞたゞ  
 確実なものである。⇒ (デカルトの考察の研究の検討)

○ Husserl の現象学批判。

普通の人間とは私に由来する全てのことは行なう。結果はたゞたゞ  
 である。それ…のたゞ。何か(他人の意思とか評判とか)はたゞたゞ  
 ありは人間の本質である。たゞたゞたゞたゞたゞたゞたゞたゞたゞ  
 であるか! 他人から認められることとは。= 世界中で最も居心地のたゞたゞ

